二〇一七年一〇月

現役の時の仕事の苦労話

―あんなこと・こんなこと―がありました

ＮＴＴ労組退職者の会神奈川県支部協議会

目　次

「発行に寄せて」　会長　新井陽太郎　1
「楽しき大船時代と大洪水」　有村幸三　2
「特別電話局時代の想い出」　井上精司　3
「今でも脳裏に残る言葉」　江成文夫　6
「小話・シャープペン」　大川正男　6
「昔の苦労話し」　久保川昭一　7
「想いあれこれ半世紀」　澤野捷治　9
「丸の内電報局の思い出」　徳岡直行　12
「思い出」　西尾まつ枝　13
「小田原電報の思い出」　野中美久　15
「私の仕事人生」　原田米子　21
「昔の線路作業」　冬柴光夫　22
「昔の仕事」　福島英雄　26
「昔懐かしい思い出の仕事」　松永代二郎　28
「電話交換手として小田原局へ」　南山夘佐子　29
「私の緊張が走った懐かしい思い出」　明珍スイ　31
「三等課長の嘆き」　若井快夫　32

（五十音順掲載）

発行に寄せて

NTT労組退職者の会
神奈川支部協議会
会長　新井　陽太郎

この度、これまで「支部協ニュース」に掲載した「過去の仕事の苦労談など」を記録集『**現役の時の仕事の苦労話** ― あんなこと・こんなこと ― がありました』として発行することとなりました。

私たち退職者の会会員は、逓信省・電通省そして電電公社からNTTへ、独占から競争へと激変する変革期、仕事の変化に挑戦しつつ事業の発展に、そして今日ある私たちの社会生活の基盤つくりに、その職業人生のすべてを捧げてきたと言っても過言ではありません。

今回、一六人の寄稿文を拝読し、一人ひとりがその時々の仕事の当事者・目撃者であることの克明な記述により、事業を支えて来たという思い・自負が行間に溢れ出ており、大変羨ましくも感じたところです。併せて、自分も含め現支部協会員約三千百人には三千百とおりの自負があり、そのうえに今日の事業があるのだろうということにも思い至りました。

これまで、個人の過去の事象を残す記録として戦争体験記などありますが、現役時代の仕事をテーマにした「記録集」は目にしたことがありませんでした。

今回特に、戦争末期の交換室の職場環境、敗戦二日前の職場対応、敗戦直後の仕事等々、歴史を残す貴重な資料となります。今だからこそ、過去の記録・歴史を残すための意識的な取り組みが必要なことを痛感したところです。

改めて、発行時期が遅くなったことをお詫びしつつ、寄稿いただいた方々をはじめとするみなさんのご協力に心から感謝いたします。

楽しき大船時代と大洪水

茅ヶ崎市　有村幸三

「はじめに」

昭和三九年六月にナショナル金銭登録機に就職を希望し、一次試験に合格、九月に二次試験合格、年明けに三次試験となり、会場には二人だけで、二月発表の結果は不合格の通知。卒業目前にどうしようかと思案していると同期の二年留年の番長が「就職はどこだ」「きまりません」「俺の家に日曜に来い」オヤジは電々の幹部だと自宅で面接を受け、そして薩摩町ビルで三科目試験。結果が来ないので京都で寺社巡りを一週間していると、東京電気通信学園普通部電信科の入学案内がきた。「あのー受けてないんですが」「電電公社の試験を受けたでしょ」「はい」「うちは公社の学校です」てなわけで、入学すると朝から晩まで電報の送信、受信の実習でともに三級以上を取らないと卒業は勿論のこと途中で退学だと言われ、カタハルマサリエの文字配列を覚え（現在はハシトチです）皆んな居残りで指を動かした。途中退学は六名もいたが、無事卒業し研修配属されたのが大船分局の電報係でした。

「大船と言えば」

大船と言えば観音様と松竹撮影所でしょと言う時代、大船は鎌倉市大船で駅周辺が市街地である。市街地の周りを小高い丘陵に囲まれている。そのエリアに暴れ川と言われる柏尾川が蛇行して流れ、町の周辺で小袋川、砂押川、いたち川が合流する川の氾濫の跡地である。地名も湿地帯に丘が点在する地域まで大きな船が入ったからとか、粟を満載する船が出入りしたから「粟船」が転じたとも諸説ある。

さて本題にする洪水はもう少し後とし、大船の電報係は毎日が待機（ひま）の連続であるが、日によって、夕方になると松竹から「アシタロケシチジカマクラエキノムラ」と五十通もの仕事を頂き、やっとすべて送信終了、あとは宿直さんへ引き継ぎと思って外へ目をやると、空は今にも降るように真っ黒、そこへ一一五のランプ点灯「松竹です宛は先ほどと同じで」「アスロケチュウシ」うれしいお仕事ですが三日分を二時間の間に処理などよくありました。

また、青島幸男のテレビドラマ「男はつらいよ」ではバイクヘルメットから半長靴まですべて貸し出し、栗原小巻や竹脇無我の映画では電話ボックスまで、中庭では「俺は男だ」の森田健作が剣道着姿で剣道部一同を引き連れ駆け回るなどなど、地域協調の良い時代でした。ちなみにお礼は無修正試写会の入場券でした。

「さて本題の大船大洪水について」

私は昭和四〇年から七年間の在局でしたが、その間に四十一年六月台風四号、九月に台風二六号を皮切りに六回の局内浸水があった。

対策はしていないのか、いや防潮扉は勿論のこと、全国でも珍しい移動用の大きな船まで常備してある。実況放送的に被災状況を文章にすると、一向に大雨は止まずに電話局の前はくるぶし程度の川となり、局の前にある蓋の無い幅広い小川の様な排水溝があるのだが、自転車で走ってきた人が道路から川となった側溝へ乗ったまま沈むなど、また近所の多くの人が機械室の空き部屋に慣れた様子で早々避難して来たり、それがいつもの事と聞いてすごいところに来たなと思う間もなく、大船駅との鉄道回線が呼ばれ、電車が止まり電報客が行列しているので切らずに受けてくれといわれ台につく。

幹部や先輩諸氏は慣れた様に書類などを二階へ運び出す。通信席は新人の自分一人で受け続ける。外の水は腰を超え胸までの状況で船や電信柱の即製筏で避難している。

防潮扉は漏れ水はあるが良好などと思っていたが、突然床のマンホールが全て吹き上がりくるぶし、脛と上がってくる。先輩はタイプライターなども全て二階に運び始め「早く上がれ」と言って消える。大船駅の電信係りに二階に避難するからこれまでと言うがあと三通、あと二通と切らせてくれない。水は腰まできて、パンツ一丁で対応、周りには人糞も漂う。限界と回線を切ってタイプを抱え二階へやっと上がることが出来た。

別の年には地下の電力室に浸水しバケツでリレーするが壁からの吹き出す水量にはかなわない。元々住所も大船町字梅田（うめた）で隣に住友生命のビルが出来るときに一五メートルのパイルを打つ時に二回で全量入り更に一本繋いだのを見ているので立地の悪さから言っても、地下に電力室を設計するなど対応は無かったのかなど考えた。

その後暴れ川の柏尾川は川底と川幅、そして流れを改修して今は収まりました。

私は七年の間、後輩の入社は無くペーペーで働き電報の集約で職場は廃止となり藤沢局の自動運用課へ転勤が決まりましたが入社から四三年の会社生活で一番楽しい時代でした。

特別電話局時代の想い出

座間市　井上精司

昭和三二年四月、電電公社に入社した。その時、薄い茶色の封筒の中に、「厚木特別電話局機械課を命じる」、神奈川電気通信部とあった。

「特別電話局」？とは、どんな局か？皆目、わからなかったが、「特別」という名がつくので、期待と不安が交錯した。出勤して、初めてわかったのは、米軍厚木海軍航空基地内の電話局であったことだ。場所は、相模鉄道の「相模大塚」駅で下車し、「厚木航空隊」行きのバスで、ベースの前で降り、正面入口は、金網で囲まれていた。大きな体格で銃を持った米兵と日本人のガードマンが立ち並び、指示により中に入り、

横の事務所で入門許可の手続きをした。所謂、入門のパスの作成で、上半身の写真撮影と一〇指の指紋押捺であった。犯罪者で無いのに?出来上がった写真入のパスは、番号、氏名、身長、何インチ、髪の色、ブラック、目の色、ブラウン等、記載されていた。このパスを胸に付けない限り、基地内は入門できない。ああ!、この中は、日本国で無く、正に、アメリカであった。

基地内は広く、本部のある高台の方から朝夕、ラッパの音が聞こえると、兵隊達は、全員、通行中であれば、足を止め、本部の方を向き、姿勢良く、敬礼をした。日本人は、歩いている時は、足を止め、動くなという雰囲気だった。

電話局は、本部の高台の木造二階建ての大きな白い建物の端の一段低くなった場所にあった。本部の直ぐ下段に芝生のグランドが広がり、センターポールには、星条旗がいつも、翻っていた。新しい部隊の交代の時は、ブラスバンドの響きと閲兵の儀式が行われていた。日本人が働く部署には、担当の兵隊が配置され、電話局担当には、二〇前後か?若い兵隊で、確か、ネルソンという名前で、「Ｈｅｙ，Ｂｏｙさん!」とひょうきんな男だった。毎日のように、見回りにきていて、当時の局長の横でも、足を組み、大きな態度をとっていた。

私の仕事は、Ａ型自動交換機の保守、故障係りの試験台の応対と電力係りの信号機の切り替えと保守、交換機の蓄電池の保守だった。六輪番の勤務で、週一回は、宿直があった。

初めて、交換機のある機械室に入った時、床から天井近くまで、カバーに入った沢山の交換機のマグネットが働く、ガチャガチャと無数の音に圧倒され、人の声などはまるで分からなかった。とんでもない職場と思ったが、慣れてくると、機械の音と人の声が判別できるようになった。

交換機の種類は、外見から見ると、同じように見えたが、ＬＦ（ラインファインダー），ＳＥＬ（セレクター）は、１Stと２ndの二種類があり、ＣＯＮＮ(コネクター)，ＲＰ(レピーター）など、機能があった。古い交換機の中に、裏面に江田島という文字があったのを記憶しているが、旧日本海軍の江田島（広島県）から持って来たものと思う。

交換機の機能は、ダイヤルをした数だけ、電磁石が働き、溝のついた金属のシャフト（棒状）を持ち上げて、通話線を所定の場所に繋げるため、正確に電磁石が動作しないと、誤接続になるため、当時は、交換機の標準調整技術をより早く、上手く取得することが、技術者として、最高のものだった。

その交換機を全てバラバラに分解、清掃し、再び、組み立て、機械のリレー（継電器）の電流調整を如何に早く出来るか技術が望まれていたが、先輩たちの話では、標準長調整の大会で、賞を取ることが誇りのようだったが、その後、大会の話の聞かなくなった。

宿直は一人だったので、始めは、不安だった。夜間、電話の故障で試験台で応答するが、全て、英語で掛かって来た。英語の正式な訓練も受けていなかった。先輩からは、とりあえず、相手の電話番号を聞き取れとのことだった。電話回線

を試験すれば、絶縁状態などはわかり、後は、ダイヤル試験をすれば、大方、ＯＫだった。幸い、基地内の電話は、使用度数計は無いため、料金苦情などの心配はいらなかった。

ある時、宿直で、ルーチ（定期）作業も終わり、仮眠しようとした時、そのネルソンが私の寝る払い下げのベッドにピストルを腰につけたまま、横たわり、起きる気配も無かった。仕方なく、食事の時の木製の食卓をロッカーの壁際に引き寄せ、硬い卓の上で一晩、惨めな気持ちで仮眠したことを思い出す。

また、宿直が台風の日にぶつかり、大雨と風で夜半、交換機の機械室に雨水が入り込み、床から足の踝近くまでつかってしまったことがあった。多数の電話ケーブルが故障となり、絶縁不良（当時は鉛皮ケーブルのため、故障が多かった）で、各交換機は発信状態となり、機械のアラームのランプは付きっ切りで、頭の中は、真っ白けになってしまった。

その時、びっくりしたのは、試験台の横に多数の電話回線を収容するＭＤＦ（主配線盤）があったが、ケーブルが使えなくなったため、特に、各基地間の軍事専用線やアメリカ本土の専用線の回復のため、風雨の激しい中、壁側の大きなガラス窓を外側から叩き割り、大きなトレーラーの上に大きな餅網のような四角いマイクロウエーブのアンテナを立て、ＭＤＦから直付けでケーブルを繋ぎ、無線で回線の切り替えをしたようだ。その素早さと大きなトレーラーは、今まで見たことも無かった。

また、専用回線の試験のため、厚木基地を一望に見渡せるコントロールタワーに登ったことがあったが、仕事柄、普通の人は入れない所で、滑走路が真下に見下ろせる場所で回線の伝送品質を測定する重い測定器（俗に、３３Ｂ）を肩から担いで行ったが、これも、想い出の場所となった。

終戦の時、連合軍最高司令官、ダグラス・マッカーサーが、サングラスとマドロスパイプをくわえて、初めて、厚木飛行場に降りた時の写真は、良く、報道のシーンで登場するが、多分、その時、基地の本部の二階建ての白い建物の出入りしたのでは?と想像している。歴史の流れの中で、自分の仕事のロケーションが、どこかで、かかわりがあったとすれば、何かの巡り合わせかもしれない、

「今でも脳裏に残る言葉」

横浜市　江成文夫

昭和三九年登戸局線路宅内課に採用、入社当時の作業の一つにマンホール清掃があり、水を汲み出しまたピンホールなどで気泡（地下ケーブルは局から乾燥空気を送り込み水の侵入を防いでいた）が出ていないか点検しました。作業は県道世田谷町田線、その頃は交通量も少なくガードマンなど勿論なし、平気でマンホールの蓋を開け放水開始。小局のためポンプ車などなく、移動式ポンプで汲み上げました。今なら直ぐにでもパトロールカーが飛んできそうな状況です。

放水を終えマンホール内のヘドロを取り除き、ケーブル点検を済ませ泥のついた顔で首を出すと、そこを通りかかった三歳位の男の子を連れた若い奥さんが、私の顔を見て「ボク勉強しないと〝このオジサンのような人になっちゃうよ〟」と言い聞かせ通り過ぎて行きました。少し勉強が足りなかったので、この格好に反省しきり、きっとそのボクは良く勉強して立派な人？になったのではないでしょうか。

小話「シャープペン」

相模原市　大川正男

昭和四六年、私が初めての係長になって赴任したY局での話である。

営業窓口担当の私の係では鉛筆を使うことが多かった。ある日、「鉛筆を良く使うウチの係は特別にシャープペンを買って貰えないですか？」と係員全員からの要望があった。私も「削る世話のないシャープペンは効率的だな」と思っていたので、早速庶務課に購入したい旨折衝に行った。が、新任の係長の力不足なのだろういろいろな口実のもと簡単に却下されてしまった。

二，三日後の事だったと思うが、休憩室で局長と雑談をする機会があった。生来駄じゃれ好きの私は「局長、この間シャープペンを要求したら、簡単に却下されちゃいました。シャーペンは削るものとは知りませんでした」と話したところ、これも洒落好きの局長がいたく気に入ってくれて、特別な計らいでシャープペンの購入が認められたのでした。

（平成七年六月退職　川崎北支店）

昔の苦労話

横浜市　久保川　昭一

その一、オリンピックの聖火が忘れられない

国際オリンピック委員会は九月七日、二〇二〇年の夏季オリンピック開催都市を東京に決定した。私は福島第一原発事故による廃炉の問題、高濃度の放射線汚染水漏れなど、企業の隠蔽体質および政府の対応が後手後手にまわるなどで、東京は決戦投票で破れるのではないかと疑心暗鬼に陥っていたが、東京に決まりホッとしたところである。安倍晋三首相は「抜本解決に向けたプログラムを私が責任をもって決定し、すでに着手している」と明言し、汚染水漏れなどの処理は本当に対応できるのか、首相の発言は国際公約となり今後の対応を注視していきたい。

私は四九年前の一九六四年東京オリンピック開催に伴う関連電話工事を経験した。現在の「ニッパツ三ツ沢球技場」（横浜市三ツ沢公園球技場）は神奈川国体で使用した唯一サッカー専用のスタジアムであり、オリンピックサッカー競技の会場となった。オリンピック開催の六ヶ月前頃から電話回線設備の増設や配線工事が発生、入社三年目の私も工事に駆り立てられた。たしか八月に入り報道機関からの臨時電話や専用線（アナログ）の申し込みが殺到、公衆電話の設置など慌ただしくなってきた。配線工事は五〇回線を上回り、二〇から三〇㎜の配管の中に屋内単線や多対屋内線（4・6回線収容の屋内線）の配線を五～六〇m引くのは容易ではなかった。ましてマスコミブース（当時は報道機関詰め所と言っていた）には報道機関からの臨時電話や専用線の設置依頼が殺到し、「早く付けろ」の抗議が局長まで届き振り回される状況でした。設置工事の際には他工事業者と競合し、新設した屋内線が切られてしまうトラブルも発生しました。最終的な電話機取り付け工事は（六〇〇型電話機の臨時電話、四一M電話機（磁石式電話機）の専用線）（公衆電話など）二週間前でしたが、数が多く大変な作業でした。試験台（故障係）との出会い試験の後に電話機を取り付け、最終呼び出し試験OKで完了です。特に専用線の四一M電話機の試験は、新聞社と直結しており神経を使いました。日にちは忘れましたがある日の午後、主任に誘われサッカー場のスタンドの最上段に立つとまさに聖火ランナーが伴走者を伴い三ツ沢競技場の周辺道路を一周する光景に出会い感動しました。赤々と燃える聖火とたなびく煙は今でも脳裏に残っています。七年後の東京オリンピックに期待したいですね。

その二、クリスマスイブに横浜高島屋や周辺の商店街の電話回線が不通に！

一九六三年（昭和三八年）一二月二四日午後三時過ぎ、横浜駅西口にある「横浜高島屋」、「名品店街」（現在の相鉄ジョイナス）、駅周辺の公衆電話回線が突如不通に。クリスマスイブの賑わいをみせはじめた繁華街は大混乱、電話局でも故障係への問い合わせが殺到、交換機は異常事態を察知し警報ベルが鳴動、担当の線路宅内課は殆ど現場に出払っていてデスク要員だけがいた。そのような状況下で何が起こったのか分からなかったが次第に判明した。昭和三九年一二月オープンの横浜ダイヤモンド地下街の建設工事現場で、誤ってシートパイルを打ち込んだ際に、一二〇〇対のケーブルを切ってしまった。横浜高島屋をはじめ名品店街など重要な回線が不通となり売り上げにも大きな影響を及ぼすことは間違いない出来事であった。私はＳＯ（サービスオーダー）工事を行っていたが、事務所からの連絡で早々に工事を終わらせ、局に戻ると現場から続々と社員が戻ってきた。課長、係長から状況の説明があり、ケーブル故障の復旧は横浜管理部工事課が担当、私たちは仮復旧のために配線盤（電話回線を効率的に分岐する装置）から必要回線を引出し、仮ケーブルを電柱に吊り上げ仮配線してお客様のＭＤＦおよび端子函に接続、仮復旧させることでした。

現横浜西電話局（旧神奈川通信部）の西通りに配線盤がありましたが、そこからだけでは仮復旧回線が足りず、他方面から持ってくることになりました。時刻は午後四時を過ぎ辺りは薄暗くなり、名品店街は人で溢れかえっていました。現今のように携帯電話があるわけではなく、公衆電話も使えない状態では友達に連絡すべくあてもなく、混乱に拍車をかけていました。検討の結果、岡野町（平沼高校付近）から回線を持ってこることになりましたが難関がひとつ、新横浜通り（当時は横浜―麻生線）の岡野町交差点を跨いで持ってきますが、当時は市電の架線があり困難を極めました。幸いにして警察官の交通規制、指示により配線するができましたが、その距離は五〇〇ｍ近くあり、冬だと云うのに汗だくの状況でした。仮復旧したのは午後六時半を過ぎておりましたが横浜高島屋さんのＰＢＸにも回線が接続され何とか仮回復をすることが出来ました。ケーブルの復旧作業は夜を徹して行われ、翌朝には公衆電話を含めかなり回復できましたが、現在に置き換えてみると各企業インターネットやその他の重要回線があり、大きな社会問題化することでしょう。加入ケーブルは洞道や地下管路で配線され、メンテナンスもしっかりしていますが、無届けの工事は皆無ではありません。パトロールの実施や監視体制の強化で安定していますが、現職の方のたゆまぬ努力に感謝したいと思います。

想いあれこれ半世紀

横須賀市　澤野捷治

今家族六人つつがなく暮らしております。もしあの時三つの道の他の道を選択していたらどうなっていたのかなと孫の顔を見ながら想像することがあります。一つは卒業前に内定していた地元の市役所勤め、二つは上京後合格した警視庁警察勤め、三つめは電電公社勤め自分なりに悩み恩師の実家にも相談しました。田舎から兄が突然上京してきて今のところでと説得され止まりました。昭和三六年一月から一二月頃の事です。まさに純粋無垢一八歳の少年でした。「歓喜の歌第九激しく師走かな」

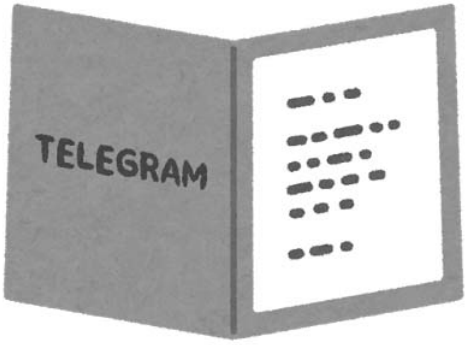
しびれるような戦慄の中なぜか私は自分の半世紀を考えていました。師走入り四百人におよぶ楽団合唱一体となって迫って来ました。池田内閣・巨人大鵬卵焼・映画はウエストサイト物語・歌はスーダラ節や銀座の恋の物語、三橋美智也・春日八郎まだまだ健在、電電公社は「すぐつく、すぐかかる」の標語とともに第二次五ヵ年計画を進めていました。

とは言え通信の主流は電報で採用の川崎電報電話局だけでも内勤外勤合わせて七〇名の職員がおりました。モールス符号のトンツーの訓練はこの年が最後となりました。工都川崎はもくもくと煙突から幾筋もの煙をはき出し日本の成長のシンボルとなっておりました。川崎市歌には煙を力強く讃える歌詞もありました。

電話加入数もまだまだ少なくふるさとへの電話は待時通話で半日掛りでした。孤独という言葉があります上京までは誰も人のいない状態と理解していました。しかし雑踏の中で大勢の中で孤独を感じ川崎駅頭の丸い噴水のそばで佇むこともありました。「孤独」という意味合・違いをして望郷の念、それがスタート点となりました。

今アトムやドラえもんの世界で現実になっております。それすらも越えている物もあります。通信情報の仕事に携わってきた者にとってまさに想定外・想像外の発展だと思います。

電報（外勤・内勤）テレックス担当・資材・契約・経理等前半はお客様、後半は業者、庶務担当の方との接点がありました。ケネディ暗殺から五〇年今年キャロライン・ケネディが駐日大使として着任しました。「誰よりも早きニュースやケネディ死・電報の特ウナ受信宿直日」入社二～三年目に新聞記者に発信されたこの事件は大変な驚きと情報伝達者としての誇りと、真夜中にもかかわらず叩き起こして知らせてあげたいそんな衝動にかられるような電報時代の大きな想い出となっております。



「涙して寒暑に堪えた仲間集う」一一月に昔の仲間が集いました。鹿児島から栃木からも駆け付け一五名程の輪となり苦労話や青春時代の話で盛り上がりました。三位一体電報部門の将来を労使で一定の整理をしました。テレックス担当は各集中局一～二名の配置、神奈川六局一〇名ぐらい各中継局（試験課）増電・信機等へオーダー発送・開通・運用指導また応対競技やテレックスの競技会の事務局等楽しい思い出があります。

一一五（電報受付）時代は難聴もあり特定郵便局からの為替電報の発信また大きな企業からベテラン女子社員からの矢のような早さの発信（アサヒのア・いろはのイ・上野のウ）には当初悩んだりもしましたが慣れてからは余裕も生まれました。

在職中三度辞表を提出したことがありました。当時飯なし下宿で憲法で定められている最低生活の保障以下の生活をしているという理由で独身寮を希望しましたが、当時は絶対数が少なく入寮出来ず辞表提出、しかし労組の調停案があり撤回しました。

学生時代に六〇年安保闘争や浅沼稲次郎の刺殺事件など日本社会を揺さぶる騒乱の時代があり少なからず政治に対する強い関心を持っていました。その下地の素労働組合に対する興味もあり労働運動へと方向が変わりました。鎌倉の労働講座の感想文で「ゲーテのもっと光を」ではないが暗闇から抜け出せるような有意義なものだったと書いた記憶があります。

当時神奈川支部青対部長は（故）浅井さん婦人部長は磯村さん（現会長）若さと弁舌さわやかさに心が躍ったものです。川崎分会も多くの先輩役員も故人となられましたが飯田実さんを先頭に、東山さん、井上精司さん等二十代三十代前半の若さで兄のように慕い、四〇分の休憩時間と始終業時に書記局に顔を出すことが大へんな癒しとなりました。

第一九回伊勢全国大会（鮎の毒素論）・沖縄返還・ベトナム反戦・日韓条約反対等種々の闘争がありました。スト権奪還闘争時に国労への支援動員があり、途中電車の中で若者が年輩の組合員へストに参加するように説得している姿が目に入りました。なかなか解ってもらえずスト権や団結の重要さをオルグしている様子でした・中原電車区へ入ると国鉄労働者、線路を挟んで支援労働者が相対していました。「団結ガンバロー」「沖縄を返せ」をそれぞれ、そして合同で唄いました。先ほどの車中の模様が浮かび唄っているうちに涙がポロポロとこぼれました。夜の電車区の光線を受けて緊張感の中、共にうたった「ガンバロー」の連帯感感動は今でも忘れることが出来ません。

全国大会や中央委に向けオルグに入りました。私は電報の六輪番（宿明含む）電話運用（交換業務）は八輪番で四百人以上の大世帯でした。宿直勤務三二人から三五人くらいで編成。宿明の方を対象に八日間続けてオルグをしたこともありました。女の園、私も自然に力が入ったことをなつかしく思います。その頃三島由紀夫事件・浅間山荘事件そして高度

成長時代・公害問題・交通戦争・光と影でもありました。
私も社会へ巣立って八年目に結婚しました。長男二男誕生毎日が「戦争と平和」長い共働きが続きました。子供等にもさびしい想いをさせた事とおもいます。保育園時代双方で子供を引きとりに行っていると思い込み仕事をし、自宅に帰ると子供が不在、夜八時過ぎに園長宅に伺い夫婦でコンコンと説教を受けた事、この頃組合役員として動員要請をしておいて自分が行けない矛盾や限界を感じ運動を降りました。
官から民への電電公社からＮＴＴへ、自由競争へ、通信の自由化へと会社の顔は大きく変わりました。当時は契約部門におり窓口改装を含めて契約案件が山のようにありました。組織整備に伴う移転・改装・引っ越しそれに伴う備品の購入等出社すると依頼文書が山積、印刷物の発注を多くあり全て期日が限定されておりました。分社化・関連会社の発足・その後、組織整備の名のもとに分離・合体・課名変更・課の統廃合が繰り返されました。その度に業務多忙を極めました。
（途中割愛）
平成一〇年代にはいるとスペシャリスト化・システム化が促進、業務の見直し一挙手一作業毎に書き出し徹底した省略化を図りました。その後再び組織整備がありようやく覚えた操作も半年～一年毎にシステム変更があり課名変更も伴い六〇から七〇ぐらいの課名があったように記憶しております。
退職一～二年前には体調を崩し日韓Ｗ杯も有り辞表を出し辞職を決意しました。この時に懇意にしていた組合役員に「預かり」となり、また就労することになりました。
この頃女房が会社を発足し自営業を始めました。物販の厳しい時代の船出でした。六一歳の時に自営の手伝いもあり三度退職願を出し永年お世話になったＮＴＴを円満退社となりました。
今年一二月八日は私、妻の誕生日であり、入籍日、そして開戦記念日になります「一二月八日記念日誕生日」私の捷治の捷（しょう）は戦捷国の勝であり、妻の洋子は太平洋の洋（ひろ）と読ませています。昭和一七年そして一九年戦争の真っ只中に生を受け、戦争による大きな影響を受けました。今あらためて平和・反戦運動の役割の大きかったこと、平和の有り難さ、重要さを感じます。
巣立って五二年半世紀を越えました。暮らしをささえてくれた電電公社・ＮＴＴそして全電通・ＮＴＴ労組にまたＮＴＴ労組退職者の会に心から感謝をしたいと思います。皆様に支えられた多くの人に接し現在も健康でいられる事、自営業にも御愛顧をいただき「貧乏暇無し」ではありますが、家族全員元気に暮らしていることに『ありがとう』の言葉を添えて感謝申し上げます。
「ふるさとの柿やかまぼこずんだかな」
「くつろいでやすらぎて心冬の月」
「伝える事ことば通信蔦紅葉」

『リズム日記』から

丸の内電報局の思い出

海老名市　徳岡直行

昭和二四年六月逓信省二省分割（電気通信省と郵政省）後、当時麻布広尾町（現在の麻布学園）にあった逓信講習所（裏には有栖川宮記念公園）による生徒募集「専門科目はモールス通信と電信法規、一般科目は英語、国語、数学、地理など」を官費で（月給三二〇〇円？）で九ヶ月間講習を受け、終了後安定した職場（都内の電報局）に就職できるということにひかれ応募、何とか試験に合格。昭和二六年四月田舎から出てきて、逓信講習所に入学、一二月に丸の内電報局に配属。当時、丸の内電報局は、国会内、農林省、東京駅内、有楽町駅内分室を抱え、都内四四局の中でも東京中央電報局に次ぐ局でした。

丸の内管内には、大きな商社も多く、外国との時差から国際電報の発着が早朝から夜遅くまで多数あり、通信課、受付課には、国内担当、国際担当に分かれており新人は、早朝、夜間の国際担当が忙しくなると呼びつけられ、国内担当が忙しい日中帯には「国内は忙しそうだな」見ているだけ、手が空いている時には煙草の買いなど大変でした。

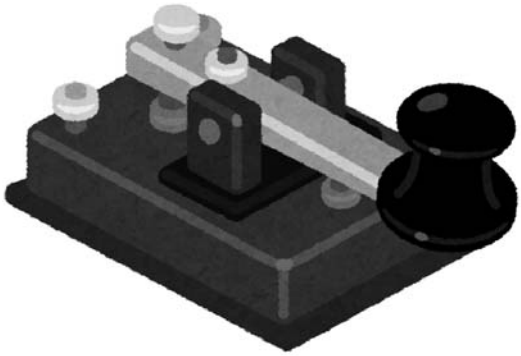
昭和二八年頃からは、国際電報の民営化、ＫＤＤの委託業務となり丸の内電報局の収入も厳しくなりました。

昭和三〇年頃から、電報中継機械化の検討が始まり、同時に報話局構想が本社から提案があり、都内四四の電報局長は「電報が電話に吸収されると自分たちの身分（局長ポスト）が無くなると」の理由から猛反対したと後に当時の局長が話していました。

昭和三七年電報の中継機械化を前に、地区ごとに管理部が設置され電話局は分局でしたが、電話局は通信局の直轄として残りましたが、間もなく管理部管轄となり、電報の斜陽化もあって、昭和四六年二月伝統ある丸の内電報局が廃局、二〇年間の懐かしい局を離れ、厚木電報電話局自動運用課の一年生となり、初めの一年間は、朝一番に出勤して全課員のお茶入れから始めました。当時三〇人ぐらいの湯飲み茶わんを覚えるのが大変でした。

この後は、丸の内電報時代の体験した善し悪しの想い出を簡記します。

一つは、丸の内電報に配属された一二月、講習所では教官が聞き取りやすいモールス符号「長音ツー、短音トン」を送信しますが、現場ではツーとトン不揃いのこともあり、受ける側も不慣れもあって「ツマキュウビョウアスタノム」という電文を「ツマキュウビシ



スタノム」受信し、それが新聞社に配達され、上司から大きな雷が落とされ、直ちに始末書を書く羽目になりました。誤受信の原因は、アは「ツーツートンツーツー」、シは「ツーツートンツートン」最後のモールス符号ツーとトンの聞き取り誤りでした。

二つは、終戦直後の食糧難のころ配給米だけでは足りず買い出しに行く必要に駆られたため仕事に影響することから、官公労に働く者には加配米として配給されたそうですが、その名残が昭和二六年末にも制度が残っていたことです。

三つ目は、電報課の服務線表は電話運用課と同様複雑で、日勤、中勤、夜勤、宿直（四輪番～六輪番）日勤は朝九時から午後五時。宿直は午後五時から翌朝九時までですが、今日のような週休二日制も無く、要員不足もあり、朝九時から翌日の午後五時まで「代番一代わりに勤務する」という名のもとに、お互いに仲間の分まで働き続け、四日から五日の旅行に行ったこともあります。当時は組合活動も激しい時でしたが、このような無茶苦茶な服務をしても目をつぶっていましたし、課長も、仕事に支障がでなければ黙認をしていました。

二〇二〇年の東京オリンピックもあと七年後、昭和三九年の東京オリンピック、都庁が丸ノ内にあったこともあり、丸ビルから都庁への道は聖火リレーを一目見ようと集まった人々で埋め尽くされていましたが、都庁も新宿に移転、中央郵便局も様変わりした今、中央郵便局の中に間借りしていた頃が今走馬灯のように目に浮かんできました。

思い出

藤沢市　西尾　まつ枝

思えば、私が入社したのは昭和二七年（一九五二年）二月九日で、藤沢局では磁石式交換機から自動式に変わったときでした。当時は就職難時代で、女性の電話交換職採用が一八名に対して二五〇名以上の応募者がありました。また、その年の一〇月二三日に電気通信省から日本電信電話公社に組織が変わり、私は電話交換職から営業窓口に配属となりました。

藤沢局は市内にある磁石式交換の郵政委託局の片瀬局、鵠沼局、辻堂局を逐次自動式に改式して、藤沢四局合併は当時市内の話題になりました。当時の営業窓口の業務の大半は、電話の架設が出来ないお客様の苦情処理で、設備や資材不足で三千件以上の架設申込みが積滞しておりました。そのうち年間架設できるのは約一五〇件程度でした。当時は架設優先順位があり、事務用が優先され、一般の住宅用は一回線で二軒が私用する共同電話しか架設できませんでした。それすら何年か待たねばならない状態で、私の給料が七千円の時二〇万円以上で電話加入権が売買されていた事を覚えています。今では考えられない電話事情でした。

その頃、公社のイベントの一つに電話競技会がありました。交換から営業まで一〇種の競技に昭和三〇年（一九五五年）から窓口応対競技が新設され、藤沢局営業窓口担当から私が

指名され参加しました。運良く神奈川大会、関東大会で優勝し、全国大会で三位に入り、管内の雑誌や通信局報、新聞の地方版に載り、私にとって嬉しい勲章で今でもその時の資料は宝物として保存しています。

昭和三六年（一九六六年）神奈川電気通信部の庶務課へ配属され、部長秘書の業務に携わりました。その時のこと、秘書室の窓から見える小間物屋の店頭に五〇センチ程のゴム紐が沢山ぶら下がっているのです。そして、それを毎朝多くの男の人が求めていくので不思議に思い、職場の人に何に使うのかと聞きますと「仕事が無いので血を売るのに血液の濃度を上げるために使うらしい」と教えてくれたのです。その頃は庁舎のある横浜駅西口周辺は未開発で、日雇いの人が大勢いたのです。それに引き替え、公社職員として身分は保証され日々の生活を営む事ができたことに感謝しました。

昭和三八年（一九六三年）、妊娠を機に元の藤沢局営業窓口へ戻してもらいました。藤沢局営業部門は春には市内にある伊勢山公園の花見の会、年に一度は毎月積み立てた会費で一泊の親睦旅行を開催してお互いの知恵や知識を交換して親睦を深めていきました。また、私の三〇年勤続のお祝いも前例にならって職場の方々が開いて下さいました。その時の私の挨拶の中で「私は一日として仕事がいやで休みたいと思ったことがなかった」と言った言葉に、当時の係長は「羨ましい」と言われました。役職を持つことは苦労があるのだと理解しました。

昭和六一年（一九八六年）全電通神奈川支部から藤沢市議会議員に出て欲しいと要望されました。私の末の子も高校生になった事もあり、働きながら三人の子育てを体験している自分にとって、行政への働きかけは必要不可欠と思い承諾しました。翌年の春、全電通神奈川支部そして藤沢分会の力で、無名な私が上位当選しました。全電通神奈川支部の組織力と団結力に他の労働組合関係者や私の周辺の人達も驚きました。

その後は一議員として組織と一体となって活動させていただきました。

議員活動の報告は毎回議会終了の都度、手作りの広報誌「まつ風」を発行し手配りしていました。三期当選後、議会から副議長に指名され、その役務も果たしました。平成一一年（一九九九年）三月には会派の代表として市長の施政方針について代表質問で登壇したのを最後に、三期一二年間の市議会議員の活動に幕をおろしました。

入社してから四七年間、私は人生の大半を全電通組合員として充実した日々を過ごさせていただきました。いま感謝の気持ちでいっぱいです。現在も一緒に入社した人達と「あじ

さい会」と名付けて、毎年六月に昼食会を開き昔話に華を咲かせています。

今年、私も傘寿（八〇歳）になりました。私の座右の銘は「人生百年最後は一週間」です。元気で長生きして最後の一週間で周囲の人達に感謝の言葉を伝えて、この世を去る。たった一回しか無い人生ですので、有意義に過ごしたいと思っています。「竹の子は見えているところは一本一本別々でも掘ってみたら繋がっている、一人で生きているのではなく温かい繋がりの中でお互いに支え合って生きている」ある佛教家の言葉が気に入っています。

これからも頑張って生きていく所存でございます。

全国から2000名の女性の参加によるによる日本女性会議で藤沢市議会を代表して挨拶

小田原電報の思い出

藤沢市　野中美久

私は、一九四九年（昭和二四年）七月から一九七三年（昭和四八年）二月迄の途中の一九六一年（昭和三六年）六月から一九六三年（昭和三八年）二月迄の箱根局勤務を除いた二二年余を小田原電報で少年、青春時代・壮年時代を過ごしてきました。最初の頃は、親父が電報課長で当時は意気軒昂な若者達の職場で何時も真っ先に親父から注意を受けていました。その後、親父は、藤沢局へ電話運用課長で転勤し、藤沢局の電話自動改式を手がけた後、昭和三四年に全国的に有名となった箱根全山改式闘争の時の小田原局の電話運用課長となり、私は全電通小田原分会青対部長でいて親子で団体交渉をする羽目となりました。そんな中で私の脳裏に浮かぶ小田原電報時代のことを紹介致します。私の小田原電報時代は、通信の世界では電報が花形でした。

昭和二四年にあった小田原局の通信回線は有線通信が東京中電―小田原の音響二重回線、横浜電報―二宮―国府津駅―小田原音響単回線と横浜電報―小田原―箱根湯本―箱根宮ノ下―箱根町音響単回線。

無線通信が二周波数を使い、伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、青ヶ島でした。伊豆の島々相手の

有線通信室で（15歳）

通信は多くの島が自家発電で電波は中短波を使っていたので感度の低い島との交信には悩まされました。特に空電（雷）、同じ周波数の他局との混信、雑音等がひどい時には何回も問い合わせようやく一通受信できた事もありました。その他に非常無線通信の一周波数がありました。非常無線通信は本来は非常災害時に他の機関と通信をするものであったが、当時は年に数回大雨等で有線回線に障害が起き不通となったので、代替えに東京中電と臨時無線回線として活用していました。昭和二五年六月一日電波法が施行され、無線従事者免許証が必要となり国家試験を受け有線通信士から無線通信士向けの特殊無線技士（国内電信　甲）の資格を取りました。国内電信　甲とは欧文電報も通信をして良い免許でした。

小田原から通信部電信係長として去る昭和四八年には通信網も様変わりしていて、昭和三〇年に電報中継機械化が実施され、電報の主体であったモールス信号での通信は無くなり、同時に伊豆の島々との無線通信も他局に移管され廃止。小田原方面（小田原市・南足柄市・足柄上・下郡）の各局との電話通信での中継基地局となり、国鉄の小田原駅発信の電報も中継することになりました。その後はＦＡＸも導入されました。

無線通信室で（17歳）

「脳裏に浮かぶこと」

一、小田原大火で一万通近い見舞電報が配達されたこと

昭和二六年一一月二八日早朝強風（一五メートルから二〇メートル）の吹き荒れる時、万年町（現・浜町海岸側）で大火（二九二軒

が消失）が発生し、この模様がラジオで報道されたため全国から見舞い電報が殺到し当日だけでも四、一〇〇通（平日一〇〇通程度）にも達し、内勤、外勤もとより他課の応援者一丸となって処理にあたったが、着信電報はたまる一方、昼頃、横浜電報から応援者三名が来局、印刷電信機（ＳＫ）を急遽設置、東京中電との臨時無線回線も措置し着信に対処しました。配達員は尻が赤く腫れ上がり自転車に乗れなくなるほど頑張りました。他課からの応援者も頑張っていたがスタンプ・日付印押しで手首が動かなくなる程でした。ラジオ放送後に新聞でも報道されたので着信電報はさらに続き、横浜電報からの応援者は予定の応援日数が来たが、あまりの輻輳に気遣い自分達が一日残ることにより小田原局員がそれだけ休養して貰えると相談し、自発的に応援日数を延ばす熱意を示して頂きました。

二、小田原電報の配達は自転車競争が強かったこと

昭和二六年から神奈川新聞主催で行われて県下横断の自転車駅伝競走では、他の企業・地域の代表を押さえて電報配達にバイクが導入されるまで毎年優勝をしていました。

競技があると今の箱根大学駅伝のように神奈川新聞紙上に大きく取り上げられ、町の話題となり小田原電報は市民からも信頼されました。選手に選ばれて主な局員は戦争中に国民学校高等科の生徒の時に勤労動員で電報配達をやらされ、敗戦後そのまま就職をしました。昭和二九年の第九回国民体育大会には神奈川県代表の自転車競技選手として二名が出場し優勝と三位となりました。

三、新聞電報を連日受信したこと

昭和二九年一一月に伊豆諸島の八丈島の先にある青ヶ島に学術調査団が入り、それに同行した各新聞社からの新聞電報が多数発信されました。通常の通信時間は一〇時三〇分、一四時三〇分、一六時三〇分、一八時四五分の四回でした。普段は一日に三～四通の発信で島と島外との連絡手段は月に数回の定期便での郵便以外は電報しかありませんでした。学術調査団の上陸後は、それに同行した朝日、毎日、読売新聞及び地方紙等の記者から新聞電報が発信され、それを受信

昭和２９年１１月１６日の神奈川新聞記事
当時は旧小田原郵便局と同居し屋上に通じる３階に無線室があり正面に見える白い筒は電報を１階の有線通信室へ送る気送管でした。

するため朝八時から夜八時迄一通の文字数が二、〇〇〇字を超える新聞電報を電波状態が悪い（青ヶ島の発電はエンジンでの自家発電）なか通常の通信は一分間八〇文字受信できるが青ヶ島からの感度（モールス信号が聞こえにくい）では一分間四〇文字がやっとで、東京中電から派遣された一名の通信士から離島するまで受信をしました。後日の話では私が青ヶ島への派遣要員の候補になったようですが、毎日長時間の送信は経験が無かったので行かなくて良かったです。

四、発信局名「オダワラエキ」が多数夜に中継されたこと

昭和三〇年代電報中継機械化方式によりオダワラエキの中継局となり、夜間二二時過ぎになると西日本方面に行く急行列車の乗客から小田原駅迄の車内で車掌が電報を集め急行停車駅の小田原駅で降ろして、発信局名「オダワラエキ」となり、通信文が「〇〇エキ〇〇ジニツクムカエタノム」等の多数の電報を二名の宿直者で受信し、それを鍵盤さん孔する作業で毎日がてんてこまいでした。

五、「こけし人形」の販売をしたこと

昭和四〇年代初期に、担当者が「こけし人形」注文の通信文を誤り、一二〇〇個の注文を一二〇〇〇個（内容は四種類のこけし人形三〇〇を三〇〇〇と〇を一つ多く鑽孔）なり、受取人が一二〇〇〇個のこけし人形を作り始めてしまい、発信人からクレームが来たので私が係長をしながら全電通小田原分会長もして居りましたので、関係組織と相談し、県下の各局、各分会に販売をすることになり「こけし人形」を一個一〇〇円で販売しました。受信人も注文の一二〇〇〇個は作っていなかったので、作った分だけ販売をしました。因みに仕入れ価格は八〇円、差額は販売の交通費等に充当をしました。受信人からは私の誠意に対し写真にある大きな「こけし人形」を頂きました。

右のこけし人形が販売したこけしの一つ

番外編

一、小田原電報ＯＢ会雑誌（想いで）より

「太平洋戦争末期の体験」

Ｍ・Ｋさん（故人）

一九四五年（昭和二〇年）春から夏にかけ、太平洋戦争は、本土決戦を目前にして、緊迫度を増し、米軍機による本土空襲も、頻繁になってきた。防空警報は、電信回線（音響通信）

によって伝達された。全ての通信が、一時中断され、静寂の中「・・・　・・・　・・・」と。単符号がながれる。思わず、固唾をのむ、空襲警報発令だ。直ちに電話交換台へ通報、そこから、関係機関へ伝達されると、市中のサイレンが、一斉に鳴り始める。緊張する一瞬である。当時の勤務は二四時間勤務（二輪番）、夜勤一人で勤務している時など、便所に行くにも、ドアを開け放しで、耳を澄まして、静かに、用を足したものだ。先輩が、続々と応召されて行く中で、「俺達がこの職場を守るんだ」と、使命感に燃えながら一生懸命に働いた。いまにして思えば、そのころ、一七才の少年だった私の心のどこかに「電信魂」のようなものが、芽生えていたのではないかと、思えてならない。

二、私の全電通小田原分会青対部長の時に（当時二五歳）

懇談会や職場交流の開催（全電通神奈川縮小版本より）

小田原分会青婦対部では、のびのびとなっていた婦人月間行事として昭和三四年七月四日に歌人の信夫澄子さん（全電通新聞短歌選者）を囲む懇談会、一二日には、大同毛織小田原工場で働く女子組合員と職場交流をおこなった。

「信夫澄子さんを囲んで」

四日の信夫澄子さんを囲む懇談会では、はじめに信夫さんが立って婦人解放運動の歴史をふり返って「一九四六年四月一〇日に、日本の婦人が、はじめて参政権を獲得した意義を、もう一度ふかくかみしめよう。それとともに今年の四月一〇日は、皇太子の結婚さわぎで、ホントの意義がぼかされてしまった。政治的背景がなんであるかについても、はっきり認識していこう」と強調した。その後の懇談会では「組合の集会や話し合いに、いつも出席しない人の問題を、どう考えたらよいか、また、どう克服したらよいのだろうか」「公社以外の職場では、託児所の問題がどんなふうにとりあげられ、また利用されているだろうか」と熱心に話し合われ、コーラス部員による、美しい合唱を聴いて散会した。

「大同毛織の女性らと」

大同毛織との職場交流の日、小田原分会から、赤ん坊を連れた共稼ぎのママさん組合員も加わった。大同毛織側は、東北と地元神奈川を主としたハイティーンの織姫達五〇名。四つに分かれて分科会では、大同毛織の場合、生理休暇をとると賃金が六〇％にへらされること、それでも、今はほとんどが一日とるようになったことが出された。全電通では、全部有給で、三日とる人も増えてきたという話をすると、大同毛織の女性たちは驚いていたようだ。ここでも共通の話題は、合理化だ。新しい機械が入ると人が減らされる。減らされた人は工場内で配置換えされる。「行く所があるんですか？」という小田原分会の人達の質問に「ええ、それまで他の職場で

は人が足らなくても、ふやしてくれないんですよ」という大同の答えは、公社のやり方に似ている。その後、家城巳代治監督と俳優の今井健二さんを囲んで、東映映画「すばらしき娘たち」を中心にした座談会では〝あの映画のなかに登場する組合幹部の描写は、どうもいただけない〟とか〝操短と一時帰休の扱い方は、もっと突っ込んで欲しかった〟などの意見が出され監督を中心に、映画を作るまでの苦心談や映画の在り方などが活発に話し合われた。

※振り返って、小田原時代を思い出すと「光陰矢のごとし」まだ色々のことが思い出されますが、紙面の都合でここまでとしますが、現在も小田原地区労ＯＢ会事務局長をしており、小田原との縁を大事にしています。

又、記事の中に出ている伊豆諸島との関係では八年前に昔を思い出し退職者の会のハイキングの行く先の一つに加えるよう提案し、式根島から初めてから、毎年伊豆諸島の温泉が出る島巡りハイキングを実施し現在二巡目に入っています。

小田原での組合活動は昭和四七年小田原分会長で退任し、次に待っていたのが当時の支部の廣内委員長、小島文雄書記長に口説かれ神奈川通信部分会長を四年間、四五歳で退職し電気通信共済会へ再就職。そして発足まもない退職者の会神奈川支部協会長に選出されました。

最後に組合活動での思い出の写真一枚掲載致しました。

小田原地区労第 36 回メーデー（1965 年）
当時全電通小田原分会副分会長でプラカード担ぎは私（31 歳）

「私の仕事人生」

伊豆の国市　原田米子

九ヶ月の訓練を終えて逓講普通科卒業。配属は出身局に戻った人、私の様に東京中電へ配属された者。中電は大きな建物で配属された課は二内三部。主として関東地方の局が多かった気がする。

初めて見る電信機、新米の私の仕事は送られてくる電報を担当席へ配付、印刷電信の受信テープ貼り、そんな仕事の毎日でした。私も早く電報を叩きたい、二重通信の席で送受信する人を見て、私も何時かはと。

八月一三日出勤すると、全員六階の講堂に集まるようにとのこと。そこには大勢の局員が集まり異常な風景。「戦争は間もなく終わる」の話しに耳を疑った。男子局員は今から霞ヶ浦に行って「赤とんぼ」を飛ばすと息巻いている。そして二度と国歌を口にする事はないだろう、最後に皆で「君が代」と「海ゆかば」を歌おうと言うことで、泣きながら歌ったこと、その日の事は今でも鮮明に覚えている。

間もなく米軍が駐留してくるので、女子は田舎に帰る様にとの事。私は罹災した両親の住む修善寺郵便局へ。東京とは比較できない静かな日常。電信はすべて手書受信、しかも複写一枚毎に炭酸紙を入れ替える。一斉通信が始まると泣きたいくらい。そんな時は半狂乱になり「メグロ」が「マグロ」になり辛かった。ヘボ代われ、プロの洗礼、悔しかったが仕方ない。一度は通る道と友人から慰められた。

男子一名電信係に配属されたのを機に、私は電話交換の方に。当時磁石式だった交換設備が自動改式の計画があり、そのための取扱手続の勉強、そして全員に対する訓練、みんなの力を借りて改式にこぎつけた。

修善寺での仕事も終わり、もっと色々な仕事をしたいと転勤希望を出し、横浜市外局へ転出。内案、即時、統計、運用部（総括）と局内異動し、それぞれの職場で仕事の発見があり大変楽しかった。

永年勤続表彰を受けたのも丁度この頃。逓講卒業生一四名中で私一人がその栄に浴した。将来の事を考え退職する事に希望を出し、一年間の嘱託扱いで昭和五一年三月に退職辞令。東京中電に始まり、横浜市外で終止符を打った。

私の人生悔いは無い。学校の帰り、蒲田駅でみかけた通信モールスに引き込まれて、が第一歩。本当にモールス信号を覚えて良かった。夫は無線なので、時折二人で信号で話しをすることもあり、今は懐かしい。

戦争が終わって一番嬉しかった事は、夜中に起きなくて済む事。空腹を悲しんだことも無く平和を喜び有難く思っている。苦労して覚えたモールス信号も、時折新聞記事や本を読む時、声に出していることがある。

「昔の線路作業」

茅ヶ崎市　冬柴光夫

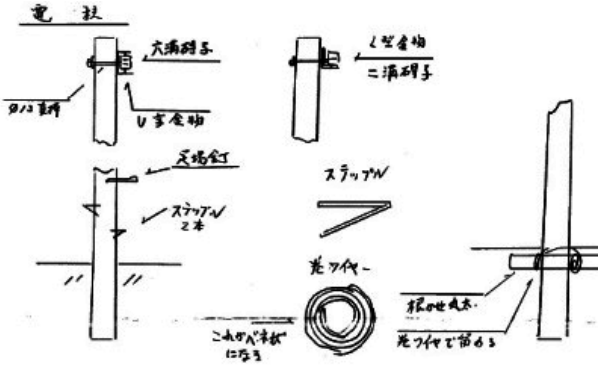
私は、「金のタマゴ」と言われた中卒採用です。昭和三二年四月、藤沢電報電話局。線路宅内課・甲種臨時作業員・線路職・三級。

初任給七千円がスタートです。午前中、辞令、各課概要説明、あいさつ回り。局長、営業、電報、庶務、機械、自動運用、運用、機械、八課と我が線路宅内課です。午後は先輩の作業服を借りて電柱の穴掘り。二日目はお茶、道具の準備を教わりました。三日目は故障多発のため、裸線の混線修理と屋内線を修理しましたが、切分は方法を知らず下部を切り離さず試験をしました。試験の人におかしいと言われ、入社三日目と言ったら教えてくれました。

一週間目に作業服、腰道具が支給されました。地下足袋が入っていました。当時の作業環境が判ったところで、作業毎に説明します。別図を参照して下さい。

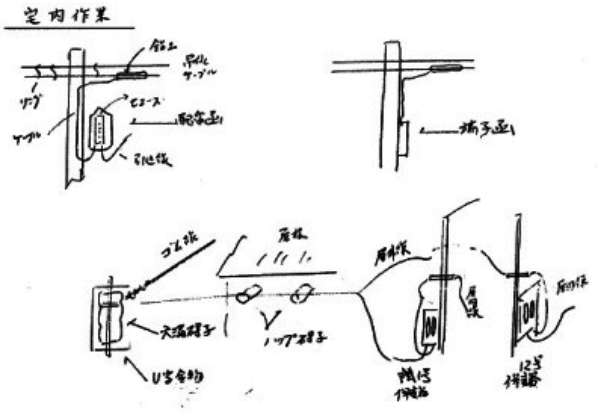
一、電柱作業

電柱作業の私の仕事は穴掘りです。電柱の長さの六分の一掘ります。当時は木柱で六・五メートル（引込柱）七・〇メートル（裸線）が多かったです。次は補助足場用ステップルの作成。八番鉄線で作りますが、鋭角に曲げるのが難しかった。次は電柱根際に取り付けのための曲ワイヤーの作成です。最初はバネ状になり使えないと言われ練習しました。装柱はボート鋸で穴をあけ、一三粍真棒でU字金物と六溝碍子を取り付けて、ゴム線取り付けをします。裸線は一三粍真棒で、四線用腕金を切り込みを入れて取り付け、建柱後に碑子を取り付けます。いよいよ建柱です。一人がスコップで電柱未口部分にあて、他の二人が電柱を起こして、その後根かせ丸太を取り付け、埋め戻しです。パンコ（地固め棒）により踏み固めて終了です。



二、宅内作業

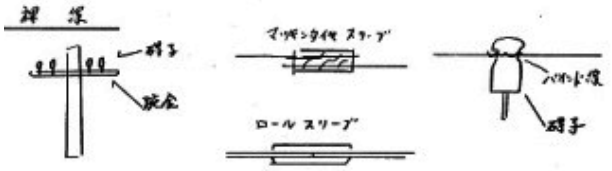
現在のSO工事です。リヤカーへ道具・材料を積み、専任の運転手が現場まで送り向かいをしてもらいます。トラックの荷台が代々の定位置です。仕事は柱で線番の対照。当時の柱には配線函（避雷ヒューズ有）、端子函、五・十・二〇の三種類がありました。配線はU字金物と六溝碍子へバインド線引き留めます。家屋側はU字、L型、金物に二溝、六溝碍子で取り付けます。その先、引き込み口まではノップ碍子で配線します。保安器は屋外用は試一号、屋内用は一二号の保安



器です。木造住宅はボート鋸で穴をあけ、碍管（現在はビニール）で屋内、屋外を接続します。二個撚りでしたが既設は平打ちでした。電話機は三号二・三号（壁掛）を取り付け、ダイヤル、絶縁試験をして終了です。当時は、お茶菓子、食事、タバコ、酒は良く頂いた思い出があります。

三、裸線作業

標準実施法で引き込み線は三スパンまでのため、ケーブル～引き込み線部分までは裸線で配線します。藤沢は線路損失の関係で一・六粍の硬銅線です。腕金は四線用ですが、既設柱への取り付けは難しかったです。昔は市外線では二・九粍、八線用腕木で一～八番までの交叉をしたと先輩に聞きましたが、旧東海道沿いの電柱は、その頭部（腕木取付）を切り離して、ケーブル架渉されているのが名残でした。接続はマッキンタイヤスリーブ



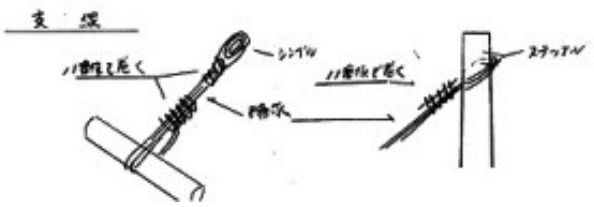
で二本の線を両方から入れ捻回をペンチでしました。その後ローラスリーブを圧延器で接続へと変わりました。架線は、豆バイス（張線器）で弛みを取って、バインド線で引き留め完了です。

四、支線作業

支線は八番線を何本も併せて丸太へ取付け、下部は同様八番線を併せ作成します。上部・下部の接続は中張線器を使いますが、五条束では五個を平均的に丸く取り付けるのは高度の技術が必要で私は見ただけです。その後は鋼撚線とアンカーブロックに変わりました。

五、直埋ケーブル

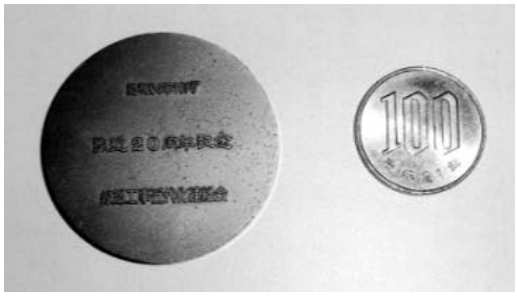
藤沢局では藤沢～厚木五四対、藤沢～大船の三〇〇対、第一熱海同軸、第二熱海同軸を保守していました。全て故障修理の思い出です。直埋ケーブルは、鉛被外被の上にジュートを巻いて保護したケーブルです。市外ケーブルには途中装荷線輪を取付線路損失を補償しています。故障の場合、接続点で振り分けをして区間を決め、最後に屋外線等を張り、ノースラップ（二号携帯試験器）位置を測定します。故障箇所を掘るとき、砂利道がコンクリートのように固いのを覚えています。同軸ケーブルでは不動坂付近で切断され、交通量の影



響で一週間くらいかかりました。全て埋設位置を探すのは別写真の様な標柱石が頼りです。同軸ケーブルの場合、途中に二坪程度の中継小屋がありました。現在ではも残置されたケーブルが出て他企業工事立ち合いで苦労しているとのことです。

六、線路近代化

色々の作業を紹介しましたが、作業の効率化に向けての展示会等は良き思い出です。私が線路工事課の時、事務局に参加した時のことを紹介します。職員のアイデアの品物を展示して良いことをまねすることで、作業効率の向上を図ることが目的です。主に材料・工具、測定器等の改良です。私は茨城の勝田と神奈川の横須賀に参加しました。事前に通信部会場等へ集めて前日に展示、二日間開催します。茨城では硬銅線を溶かした記念メダル（別写真）は大事に保管しています。



また、その中から良い品物は通信研究所へ特許申請をしました。私も三件申請しました。これからも安全・作業効率の向上を楽しみにしています。

そしてこんな出来事もありました。

「鋳物四〇屯が引地川へ落下　第七地区」

さて、話しを始める前に当時の私の環境を説明します。昭和三二年四月藤沢局線路宅内課に配属されました。当時は神武景気で電話を含めいろいろのことが発展途上でした。最初の仕事はお茶入れ、清掃、出発前の道具と材料の準備です。先輩は俗称で指示します。例として、バンコまたは娘（地固棒）、ツル（つるはし）、スコ（スコップ）等、また材料を覚えるのも大変でした。当時はゴム線・裸線・鉛被ケーブルが華やかな頃でした。

その後、現場四年デスク三年半を経て、神奈川部線路保全課転任。その年はオリンピックが開催され、江の島はヨットの会場となりましたが、私は転任して入場パスがないので見学できませんでした。

また東海道新幹線の開通と、その後の経過調査で鴨宮の国鉄変電所で、国鉄社員と誘導調査をしたのは良い思い出です。その時、運転士より車掌の方が偉いと聞きました。その後四二年二月に線路施工課へ配属、最初の一年半は積算係で当時積算室が鎌倉ゆかり荘の一室を借りていましたので、鎌倉へ

出勤が多くありました。その後施工係へ異動し。藤沢監督事務所にチビ監（小規模工事担当）配属されました。所長も当初は古参監督が兼任していましたが、その後管理者の所長が配属されました。事務所の庭は昔、畑であったため先輩がキュウリ・トマト・ジャガイモ・ラッキョウ等を朝早く出勤して作ってくれ、夜の飲み会でつまみとして活用しました。それでは本題に入ります。

冬の寒い朝でした。出勤すると関東通信局の原監督が「冬柴、藤沢～辻堂中継ケーブル一〇〇〇対がセットアース（全回線故障）だ。早く仕度をしろ」と言われました。私は前日担当工事で二カ所切替工事がありました。一カ所は藤沢市大鋸の大正橋付近で第一熱海同軸の支障移転に伴うもので、午後八時～一一時まで立ち合い、鉛工作業等は工事長に任せ、監督事務所に帰りました。当然、もう一カ所は立会していません。藤沢市元町、旧松下電機付近の富士見橋の橋梁架替工事に伴う支障移転で仮橋への仮移設工事の切替です。一〇〇〇対の切替は一日でできないため仮防水工事をしましたが、車両振動等により、ゴム巻部分から浸水したのが原因で、私が現場到着時は乾燥が始まっていました。その一時間程で大半が回復しました。そこまでは請負会社が仕事をします。それからは経過説明の資料、再発防止対策等資料作成が大変でした。

翌日は説明資料を持って、課長同席で植田通信部長に経過説明をしました。二カ所の切替を誰かと相談したかと質問され、私個人の判断ですと答弁しました。その後、所長・課長が説明に苦労していました。隣室で待っている私にも聞こえて来ました。当時のA級障害は、監督名・請負工事会社・主要因は全国へ周知され、変なところで有名になりました。一件落着、やれやれと思いましたが、その後さらに大事故が発生するとは誰も考えていなかったと思います。

朝、事務所に出勤すると、また富士見橋で故障とのこと、先の辻堂～藤沢中継一〇〇対、市内ケーブル一八〇〇対、第二熱海同軸である。保守局の藤沢では、まだ引継ぎを受けてないので工事側での修理を求めています。どちらでも修理は請負業者で実施するので、現場確認をしました。仮橋は中央部分で折れ曲がっており、トレーラーが折れた仮橋の上で留まっています。鋳物は引地川に落ち、かつ仮橋にひっかかる状態でした。鋳物の重量は四〇屯、トレーラー自重は二〇屯、仮橋重量制限は五屯、落ちて当然です。警察の調べでは、運転士は途中で気がついたが、一人のため後退が難しいので、何とかなると判断したとのこと、トレーラーは前部が反対側に到達した時、後ろへ引っ張られる感じがして轟音とともに橋が落下したとのこと、さて復旧工事は、旧橋の管路の再生と現在故障ケーブルに対し、架空ケーブル状態にして一時復旧です。作業中もトレーラー重量により旧の仮ケーブルが引っ張られ、二次災害にならないよう、十分注意して実施しました。

翌日、一〇〇屯を吊るトレーラーが来て、事故トレーラー

と落下鋳物の撤去が予定通り実行された。吊りワイヤーは私の腕三倍ぐらいが数十本あったのを覚えています。撤去作業は反省会出席のため確認していません。昔、山登りする人が、現地に着いて天候が悪ければ登山を中止する勇気が必要と言ったことを思い出しました。運転士さんも勇気を持って運行を中止すれば、会社も倒産しないで良かったと思います。

昔の仕事

横須賀市　福島英雄

＊前置き

私が電電公社（今のＮＴＴ）に入社したのは、昭和三六年（一九六一年）四月です、七月まで新入社員研修を受けて七月に東京の霞が関電話局に配属されました、霞が関電話局は内幸町一丁目にあり、敷地続きのビルには本社が入っていました。

神奈川では「花の三八」と言われますが、東京は少し早く私の入社した「三六年」あたりから大量採用が始まっており、私は中央線で武蔵小金井から通勤していましたが、中央線の各駅に電話局がありました。

同期入社で霞が関電話局に配属されたのは一一名、私は「第二機械課」になりました、総勢三六名の大所帯、当時は野球が流行っており、各課に野球部があり、荒川土手のグランドを借りて職場対抗の野球大会などをしたり、第一次ボウリングブームだったので、職場の仲間でマイボール・マイシューズ・ユニフォームを揃えて私は週二，三回投げていました。

残業も多くはなかったので、仕事帰りに「今日帰りに一杯行くか！」などと誘われ、良く飲みに連れて行ってもらったものです。

前置きが長くなりましたが、仕事の話に入りたいと思います、仕事の流れを整理して覚えてはいないので、特徴的な出来事を書いてみます。

＊宿直は三名、毎回ご飯作り

霞が関電話局の機種は当時ラインスイッチでＡ型、宿直は六輪番、三名で仕事をしていました。

宿直の日は炊飯器でご飯を炊きます、主任・先輩・私なので当然メシ当番はいつも私、主任が社交的な、のんべの場合はたいてい誰かが泊りに来るので、野菜炒めなど人数が増えても大丈夫なおかず、そうでない主任の場合は焼き魚などを人数分作るなど考えながらやっていました。

＊一雨、一〇〇〇件

当時の地下ケーブルは「ガスケーブル」では無かったので、台風や大雨が降ると必ずのように「ケーブル障害」が発生します、ケーブル障害が発生すると「一次セレクタ」という機

械が搭載された架はセレクタが働きっきりになり、それを見つけると「ビジーリング」という一〇円玉を大きく厚くしたような器具を差してランプを消していきます。

三階に宿直室があり二階に一次セレクタがあるので、アラームが鳴ると、非常階段を駆け下ります、焦った先輩が、すどうしのガラス扉に頭を打ち付けて割ってしまったこともありました。

＊テント村

当時（現在も）霞が関電話局の管内には国会議事堂があり、組閣があると大変でした、急きょ作られた各マスコミのテント村に専用線や臨電を引くために線路宅内の人たちは総動員、私達機械の人たちも大量の局内ケーブルを引きます。

万一の故障に備えて線路宅内の職員はテント村に待機、機械の人も待機します。

＊紅白歌合戦

当時ＮＨＫが霞が関電話局の管内にあったので紅白歌合戦の前は準備が大変でした、大量の専用線・臨電を開通させるため局内ケーブルを引きます、普通の加入電話は一本ずつ引きますが、紅白歌合戦の時は一〇本ずつ何回も引いていきます、ＮＨＫが代々木に移転となり、この作業はなくなりました。

＊ビジートーン通話

今も昔も若者の考えることは想像もつきません、ビジートーン通話（こういう名前では無かったかもしれません）もその一つ、週刊誌等でも取り上げられたりしましたが同じ時間に同じ番号に大量に掛けると当然話中音（ビジートーン）になりますがその状態で同時に複数の人が話をしてしまうのが流行りました。ＢＴなので通話料金は掛かりません。

今は音声カットしたので出来ませんが複数通話をしながら「今度は何番で話そう」等と言っています、私たち、は「バッテンスキー」（試験用送受器）で割り込み「この行為は違法です」などと説明したりしていました。

バッテンスキー

＊まるで地獄の一丁目

入社して一〇年くらいでしょうか、分会の書記長をしていた私は、春闘の一斉回答日に書記局に泊まり込んでいました、当時近くの「内幸町交差点」では地下鉄の工事が行われており、

そこで陥没事故が発生したのです、局長は「春闘などどうでもいい」と現場に駆け付けていきました、私も少し遅れて現場に行きました。

あたりは硫黄のようなにおいが充満し、敷き詰められた鉄板が大きくめくれ陥没した大きな穴の中には電柱が見え、地下ケーブルが何本かかろうじて切れずにぶら下がっていました。

初めて見る光景と臭い、思わず「地獄の一丁目」という言葉が私の脳裏に浮かびました、陥没事故の現場はその後数か月かけて埋め戻し、現在では都営地下鉄三田線が毎日何事も無かったように走っています。

霞が関には一五年勤務し、横須賀に転勤、その後機械業務の集約等があり横須賀一一六受付担当となり、そこも集約でアーバンビルに移り横浜一一六と統合、一一六第六受付担当を最後に平成一四年四月、五九歳でＮＴＴを退職しました。

昔の記憶をたどりながら心に残っている仕事を書きましたが、記憶が定かでない部分もあり、記憶違いもあるかもしれません。思うことは、当時のほうが職場のみんなの気持ちがまとまっていたように感じています。

昔懐かしい思い出の仕事

横須賀市　松永代二郎

私が入社したのは試験課と云う職場でした。仕事は一一三番故障係りでした。

最初はお客様相手に故障、苦情の対応でしたが言葉では大変苦労しました。

次は線路の人を相手に電話回線の試験をする事でしたが大変怖い人ばかりで試験が遅れると早くしろ等いつも怒られていました。

故障の中でも一番大変だったのがケーブル障害でした、昔は雨が降るといつも発生し大量のお客さんが故障になりました（昔のケーブルは外皮が鉛皮だったので虫等に食われ穴が空いて雨水が入って絶縁不良を起こす）。

ケーブル障害が発生するとＢＷ試験機を使用します。ＢＷ試験機とは高圧電流を流し、中のケーブルを溶解しループを作ります、そして三号携帯機を使用し抵抗値を測定し距離を算出し、柱から何メートルと測量し、テレホイト機器で音を流し線路に手配します。

一年位経ってから泊りをするようになり、夜雨が降るとケーブル障害が出て大変な思いをしました。発生したエリヤの回線を全部試験し絶縁等を測り悪いケーブル区間を特定し絶縁の悪い対数にＢＷ試験機で高圧電流を流しますが一人で

実施するのが非常に怖くて手が震えながら試験機のSWを押したのを覚えています。

また、何回か線路に柱から何メートルが故障個所ですと手配し、一発で障害箇所が当たった時、線路の方々から、すごいねと褒められたのが大変懐かしく思い出します。

電話交換手として小田原局へ

小田原市　南　山　卯佐子

昭和一七年小田原郵便局に採用された。採用方法は各学校に割り当てがあり私の学校へは二名あったが私一人が応募した。面接のみで他校も含め八名が受けた。採用が決まり四月から出勤すると採用者は一八名だった。私たち以外一〇名の人達の話では採用試験応募者が百名程いた中からの一〇名の人たちと云われた。一〇名の中に女学校卒業者が四名いた。

入局と同時に三ヵ月の訓練が始まった。仲間にも毛髪の長い人がいて三つ編み等にして来るよう注意された次の日から来なくなった。又加藤隊長の歌をうたった時、流行歌をうたってはいけませんと注意を受け厳しさを感じた。

当時の勤務状況は六輪番で日勤三日夜勤宿直宿明で休暇は宿明の次の日であるが月二回であった。常日勤者は土曜日半日、日曜日休みで一寸羨ましかった。

共電式の交換作業は加入者台で市内通話を、市外台で市外通話を接続するもので他に中継台があった。この台は市外通話を接続するとき申込者番号を告げられ中継台のコード番号を指定し告げられた番号に接続する台で、担当する事が多かった。

市内台で加入者から話しかけられ相槌を打ったり問いに答えたりした扱いの終了後、監督台から取扱は決められた通りにして馴れなれしい応対をしてはいけませんと注意され、印鑑を持って来て下さいと云われた。監督台とは総ての取扱を監視出来る場所で書記補（現在の係長）が担当していた。扱者の中には監視されるとすぐ判ると云う人がいたが私は判らなかった。

中継台の扱いは前述の通りでコード番号を指定するのは云われた順に取扱う事になっているので、その通りに扱っていると監督さん（現在の主任）が来て先輩から先に指定するよう注意されたがほぼ順番通り指定した。又試験台からも接続依頼があった。試験台担当者が番号を告げたらすぐ接なげと云われたが取扱は順番に接なぐと告げた。次からは「又おめえかよ待っててやらあ」と云われる様になった。その人の声を聞かなくなり出征したとのこと戦後復員していた。この台は午前中忙しく大変だったが面白く楽しかった。

市外台では東京横浜等忙しい台は先輩が担当し国府津湯本等は若い人が担当した。接続用の市外線は通常二局間で使用しているが二回線だけ三局で使用していた。一回線は小田原

箱根町御殿場でもう一回線は三島箱根町小田原であった。この台を担当した時小田原が終り箱根町三島間で喧嘩を始めた。割り込んで時間が勿体ないから小田原に貸してと告げるとすぐ両局で取扱い始めた。この台を担当する事が多かったがスムーズに取扱い出来たと思う。

取扱量が多くなり始めた頃管理所勤務となり二年程で交換係へ戻った時は大変忙しくなっていた。時期は定かでないが機械係の人達が市内外の交換台の各部分の調査を始めた。各台は大阪局使用後のもので設計図がなく増設の為の調査であった。その後市内台は一台、市外台が二台増設された。増設後加入者から「あんた達の声を聞きたいので自動化に反対したのだ」と云われた。この時まで自動化の事は知らなかった。暫くして小田原の代わりに藤沢が自動化したと聞いた。小田原の自動化は昭和三三年であった。

取扱以外で大変な事があった。戦中の暖を取る方法は大火鉢を広い交換室に三個だけ、戦後はダルマストーブで石炭を使うが中々燃えつかず苦労した。そして又大火鉢に戻った。

梅雨時は交換室の窓を開けられない事が多く気分の悪くなる人が出た。私が勤務中三人が気分悪くなり交換台を離れたので窓を少し開けた所機械係の人が来てすぐ窓を閉めろと云うので気分の悪い人が出たからと告げても閉めろの一点張り、私は「機械と人間とどっちが大切か」と聞くと「機械だ」と云われ大変驚いた、そのあと一〇分したら必ず閉めろと云って帰った。一〇分後に窓を閉めたが、当時空調はない。大変な事ではないが面白い事を云う人がいた。交換手は頭の良い人を採用しないのよと、私は成績は中位ですと告げると下を向いて去った。

昭和一八年頃まで袴姿で通勤出来た。事務服は白で洋服用と着物用の二種類あった私も少しの間袴姿で通った。休憩室にトルコ行進曲のレコードがあり始めてオーケストラの曲を聞いた。この時先輩から蓄音機に座布団掛けてと云われた。曲は素敵だったが一回で終りにした。休憩時に流行歌をかけ覚えた。主に藤山一郎と東海林太郎もので現在もカラオケで歌っている。

休みが月二回の時代の仮眠時間は五時間で後徹の時は九時から休むが一一時頃まで仲間と話す事が多く楽しい時間である中に交換は苦手と云う人がいたが私は面白いと思っていた。五時間寝ると宿明で箱根等近くへ出掛けるのは苦にならないので希望者同士出掛け楽しんでいた。又次が休みの時はたまに一泊もした。

戦後間もない頃、温泉街等の旅館の交換手は私達の給料の二〇倍支給されると聞き私もその気になったが家族から今は大変だが務め続けた方が良いと云われた。この時期退職する人が大変多く年二回募集していた。同じ時、湯本局が二名残し皆退職したので採用出来る迄出張扱いで何日か通った。交換台は磁石式なので違う経験が出来てよかった。

戦後すぐバレー部が出来た九人制で結構上手な人がいてすぐチームが出来私も参加した。一回目は神奈川大会を横浜の

三沢コートで関東大会を浜松町駅近くのコートで実施し関東大会へも参加出来たが二回目から他局チームが強くなり神奈川大会で敗退した。主に戦中戦後の状況を思い出す儘に記したが四四年間の勤務中には様々な出来事があったが、ここに記載したものはほんの一部である。

私の緊張が走った懐かしい思い出

横須賀市　明　珍　ス　イ

東京オリンピックの年に入社しましたから、さかのぼること何年経ったのでしょう。

まだ、宿直勤務に入り日も浅く、新鮮な時期のハプニングというか出来事でした。

その頃、私は一〇四番の市内案内勤務でした。その日の宿直は深夜三時までの当番でした。

午前二時を過ぎると担当は一人になります。この時間になると、かかってくる電話は酔っぱらいや苦情ばかり。案内はというと飲み屋・タクシー・ホテル・ラーメン屋などお決まりのコース。

慣れるということは、適当に処理ができるということで、ひとまず人並みにこなしておりました。

深夜勤務は、午前二時から三時までが勝負です。時計が二時半をまわると上まぶたと下まぶたが仲良くなるのが常です。でも、一人で責任を持ち、処理するという緊張感が生まれます。

午前二時半を回ったころコールがあり応答すると、これが大変な電話でした。

局近隣の重要回線が不通になっており、どこへ問い合わせすればよいでしょう?

私も一瞬あわてました。とにかく県庁・ＮＨＫ・消防局等が収容されているエリアなのです。

電話をかけてこられた方は、ＮＨＫの方だったと思われました。電話回線が使用できないと全国からのニュースが入らず、朝四時の放送開始に間にあわない！と大変あせっておられました。

そのうち、救急車が繋がらない！なんか一瞬にして騒々しくなり、気がきでありません。

とにかく、故障係を呼ぶしかない！でも表示されている番号では出ない。

どうすれば良いの！　焦りだしました。冷静に冷静にと言い聞かせながら対応しました。

故障係のあらゆる電話に掛けまくりました。自分の中では、一〇分ぐらい呼び出したように思いますが、実際には五分から六分位ではなかったのではないでしょうか。

故障係は道路を隔てた建物でしたので、歩いて行こうとまで考えました。そんな心境で興奮している所に、故障担当者より応答があり重要回線の不通を知らせました。

これで、私の責任は果たせたのかしらと、少し気が楽になり疲れが〝どっと〟きました。

あの当時は故障係を呼ぶにも一苦労でした、が、今は文明のＩＴ時代なのでこんな事は無いでしょうね。その昔は、深夜勤務のときにナイトベルを忘れると本当に大変でした。

後日故障担当者よりお礼の言葉を頂き〝命の恩人〟とか・・・やはり重要回線を持っている担当局はそれなりに大変なようですね。また偶然に担当者が私の友人の知り合いだと後日知らされてびっくり!!　こんな話も今となっては語り草でしょうか。

「三等課長の嘆き」

藤沢市　若井快夫

一、時流に乗って

私たちの職場は昭和六〇年に電電公社からＮＴＴとして株式会社へ衣替えした。通信事業が自由化され、長距離通話料の低廉化、ＩＳＤＮなど通信のデジタル化、携帯電話の普及等、次義と新しいサービスが打ち出された。そうした民営化の基で私たちのおかれた職場の現実は、なかなか厳しいものがあった。

民営化とは即ち市場競争に立ち向かうということだった。各部門にそれなりの影響があったが、わけても営業部門の販売担当は多大な影響を受けた。

幸か不幸か、ＮＴＴに大転換をした一年目に、私は勤続三四年にして初めて管理職の立場になった。Ｙ局に通信機器販売課長として赴任し、交換機、電話機、ファクシミリ等通信機器の販売に携わることになった。格好良く言えばセールスマネージャーとして競争の第一線に立ったわけである。

二、肉屋

そうした着任早々のことである。一人の外販担当者（通信コンサルタント）が顧客のビジネスホンをダウンさせてしまった。機能改善の申し出を受けて、本来なら工事担当に依頼すべきところを自分で主装置をいじって駄目にしてしまったのである。顧客は食肉の卸問屋であり、電話が不通になったために取引上、多大な損害を受けたというクレームになった。相手は頭から湯気の出るほどの怒りようで「お前では話しにならない。局長を出せ！」と。そして「損害をどう賠償してくれるか」という話しになった。局の予算からとても捻出できる額ではない。

私が窮余の一策として、「私たちの責任で損失を売りさばいてみましょう」と提案した。私はここへ来る前は永年セールスマン（通信コンサルタント）として過ごして来た。通信機器を売るのも食肉を売るのもセールスのマインドは一つである。と覚悟を決めた。それから食肉のセールスが始まった。

毎朝顧客宅へ行き、食肉パックを抱えて局へ戻る。ミスをした外販担当者には外販の傍ら食肉パックを持参させ売り込みをはからせた。自宅にも持ち帰って隣近所へも売り込んだ。今一つ有力な販売先として思い浮かんだのが、電話運用部門の女子社員だった。彼女等の休憩室への肉のパックを持ち込み、事情を話して売り込みに努めた。彼女たちは快く協力してくれた。今もって感謝の念にたえない。局内で顔を合わせた時「肉屋さん！」と呼ばれたものである。

新任の管理者として着任早々とんだトラブルに振り回された。折角。通信機器の販売にガンバロウとやって来たのに・・・。「いったい俺は何を売りに来たのか?」と。

三、ノルマ

競合他社との販売競争の中で、売り上げのノルマが課せられ，販売の成果が問われる。Y局で三年の経験を積んで、幸いにも居住地に近いF局に移された。しかし、販売目標はさらに高く求められ、外販担当者（通信コンサルタント）一人当たり月額三〇〇万円の売り上げが課された。マネージャーとしては一〇名の担当者を抱えていたから、トータルとして月額三千万円が私にとっての目標額となる。年間計画にすると三億六千万円、今思えば気の遠くなるようなノルマである。

各担当者に三百万円をクリアしてもらわねばならないが、当人のやる気や能力には差がある。目標に達しない人間にはハッパをかけ、一方、好成績を上げた担当者には賞賛を惜しまず、彼らの意欲を高め、いかに気持ち良く働いてもらえるかの気配りが肝要であった。ノルマの達成には通常の勤務時間帯ではなかなか厳しい。お客相手の商談は夜間に及ぶこともあり、当然超過勤務を見込まなければならない。ところが会社からは超勤手当の枠がはめられ節減を強いられ、思い通りにはいかない。いきおいサービス超勤という事態は避けられなくなる。意欲があって好成績の担当者ほどそうした傾向が強い。私は、彼らができるだけサービス超勤にならないよう気を配った。各部門へ割り振られる超勤予算の枠を無視して、「とにかく時間外を先にどんどん付けてしまった方が勝ちだ」と事務担当者に知恵を付けた。後で総務部門とトラブルとなったことはしばしばだった。

民営化の波にさらされた企業経営の中で、通信機器の販売は重要な役割であったが、第一線に立つ外販担当者の働く条件は過酷にならざるを得ない。マネージャーとしての使命と働く仲間の連帯の板挟みで苦慮する場合が多かった。

四、ココム違反

当時、業界で〝ココム〟という対共産圏へ戦略物資の輸出を禁止する法制度があった。米ソの冷戦構造の最中のことであり、今では全く無効な話しなのだが、この法の網に引っかかりそうになる危ない経験をした。この禁輸物品に含まれていたビジネスホン主装置を二人の外販担当者が売り込んだが、相手は中国と非合法の取引のあるブローカーだった。禁輸物

品をスクラップに混ぜて輸出する手法を使っていたが、大型主装置を紛れ込ませるのはとても無理で、そのまま輸出請求をして税関に持ち込んでしまった。それを後から聞いて驚愕した。前年、東芝が禁輸物資を輸出したのが摘発されて逮捕者を出したことが記憶にあったから、その二の舞になりかねないと思った。

直ちに防御手段を講じなければならない。禁輸物品のリストを調べ、どこかに抜け道はないかと模索した。上司に打ち明け、本社へも相談に行ったが解決策は見当たらない。結局、品物を税関から取り戻すしかないと思った。そうするには販売契約を取り消すしかない。ただ相手が正道を歩く顧客ではないだけに難題だった。東芝の例などを持出し、泣き付く形で了解を得た。その輸出品が不要になったという理由書を作ってもらい税関に提出して何とか品物を取り戻した。

こうして最悪の事態は避けられたが、違約金の支払いという重い負担が残った。結局、個人的負担にならざるを得ない。給料のほぼ一ヶ月分にも相当する額だったが、あくまで自分の監督責任であり、上司まで巻き込んで摘発を受けるよりずっと増しであるとの考え方で割り切った次第である。これはある意味、販売成果を上げんがための勇み足であったと言えるのかも知れない。

五、いじめ

ＮＴＴにおける私の管理者生活は都合六年間だったが、定年になる三年前、Ｆ局に着任した時の話しである。新着の管理者訓練として部長等から講習を受けた。元々、会議のような座っていることの嫌いな私はついうとうとと居眠りをしてしまった。「管理者の心得・・・」というような講釈だったから、当然後から注意なりお叱りがあるものと覚悟していたが、それはなく寛大な上層部だなと思っていた。ところが、それから毎月開かれる幹部会議の私の席が局長席の真ん前に据えられていた。狭い会議室で殆どお互いの肩が触れあうほどなので、局長とは睨めっこするような形になった。懲罰の意図は明かで、実に陰湿なやり方だと思った。元来、上司との付き合いは苦手な方で、権力者と親しく会話することなど出来ない質だったから。それからの幹部会議はまさしく〝針のむしろ〟であった。

昨今、学校や企業社会でよく〝大人のいじめ〟の報道がされるが、たしかにそうした例に照らして〝大人のいじめ〟が実行されたのだと思う。むしろ講義の当日、「居眠りなんかしている場合か！」と怒鳴られた方がどれだけ感じが良かったか知れない。ただ、そこで尻をまくってポストを棒に振るわけには行かない。定年までの三年間、鬱屈した感情を抱いたまま会議に参加していたが、内心「それなら業績を上げて見返してやろう」と思ったものである。一見陰険なやり方だが、あるいはその辺に相手の本当の狙いがあったのかも知れない。

「現役の時の仕事の苦労話」

～あんなこと・こんなこと～がありました

2017年10月発行

発　行　者：ＮＴＴ労働組合退職者の会
　　神奈川県支部協議会
編集責任者：徳　永　由美子
編　　集：野　中　美　久
印　　刷：㈲ 関内印刷